

## をかしな結婚

無償の愛は、限られた相手へ向けられ全てを捧げるが、有償の愛はもっと広く、誠実という言葉にも置き換えられるのではないか。

この作品の主人公のまさは、片山家の女中として長年勤め、その働きぶりから片山家には無くてはならない存在になり、片山家にいる限り生活の安定を得られ、まるで家人のように振るまえた。戦中も片山家に止まり、軽井沢の別荘に疎開するとそこを我が家の如くしきる。戦後、片山家が東京に戻るが、東京の家が狭い為、荷物番として軽井沢に残り、そこで浅田氏に出会う。隣の別荘に住む浅田氏は中風で歩行が困難な60過ぎの財産家で、夫の復員を待つ娘に看病をされていたが、まさを対等に待遇し、そのお礼としてまさは女中の仕事を代わりにしていた。その内に夫が復員した娘は、浅田氏の看護をまさに託し、夫の待つ神戸に帰郷していった。まさは骨身を惜しまず、浅田氏を看病し歩行困難な氏を支え温泉に連れて行くなどして大変に感謝される。父親の処遇を悩む娘は、献身的なまさに父親との結婚を勧める。浅田氏もまさが良ければと二人は結婚する。

ここに出てくる登場人物は、みなそれぞれに下心がある。まさは片山家では生活の保障が得られ、浅田氏と結婚するに当たっては、その財力に目がいく。

片山家の方でも、良く働く女中としてのまさの労働力が必要であったし、浅田氏も献身的に仕えるまさの労働力が自分に都合が良かった。

そういう風に、それぞれの思惑や都合があるが、それらを踏まえてもそこには愛情がある。

片山家では、まさの老後の世話をしようと思つて心づもりしているし、子供にもそう言い聞かせている。何より姑のような振る舞いを、まさに許す所にもう主従関係以上の愛情を感じる事が出来る。

浅田氏やその娘も、まさをお客として接し感謝して、まさが結婚を望めば、それを叶えてやる。そして、まさも自分に出来る事を骨おしみせず働き、相手が喜ぶだろう事なら大変な重労働でも厭わない。これはどちらが偉いという訳ではない。お互い共存共生する支え合う関係として成り立ち、有償の愛によってお互い誠実に接している。ここにある共存、支え合う関係はもっと押し広げれば、社会全体として考えられる。皆がそれぞれの場所で分業し合い、支え合って社会を作り共存しているのだから。

この有償の愛という誠実さが、今、自己本位な金銭主義によって薄れてしまっているし、国同士でも、自国の利益ばかり追い求め、共生という言葉を忘れてしまっているのではないか。

個人に無償の愛が、社会には有償の愛が、今、必要なのだとこの作品で感じられた。